

互いに高め合う環境の中で、よりよく考え表現することのできる生徒の育成

— 社会的事象の因果関係を考察する学習を通して —

富谷市立富谷第二中学校 千葉 真史

1 主題設定の理由

本校では、「明日を拓く夢をもち、創造的に生きる生徒」¹⁾、『知・徳・体』のバランスの取れた生徒の育成²⁾を目指している。社会科では特に「知」、つまり、「賢く考え、知識と知恵のある生徒」³⁾を育成することが求められる。しかし、生徒の実態としては、学習に真面目に取り組む生徒が多い一方、基礎的・基本的な知識・技能の習得が進まない生徒もいる。また、全体的に、習得した知識・技能を活用し、思考力・判断力・表現力を駆使して創造的・発展的な課題解決をしようとする姿勢が十分ではない。基礎・基本の習得と発展的な学習のより一層の充実が必要である。

富谷市では「学び合う 高め合う 尊び合う」⁴⁾教育を推進しており、その一環として学習院大学 佐藤学特任教授が提唱した「学びの共同体」の理論に基づく「学び合い」の授業⁵⁾に取り組んでいる。本校でもこのスタイルの授業を進めてきた。

本年度は、学び合いの授業スタイルを用い、互いに高め合う環境の中で意見交流を行い、社会的事象の因果関係を考察する学習を通して、基礎・基本を習得しつつ、よりよく考え表現できる生徒を育成することが重要と考えた。

昨年度までの社会科では、講義形式の授業を基にした学習が多く、主体的な学習が十分ではなかった。そのため、今年度は学び合いを通して主体的な学習を進めていきたいと考えた。

また、社会科の学習では、社会的事象間の因果関係を捉えることが大切である。因果関係を自ら見つけ、関連付けて思考したり、その結果を文章で表現したりすることのできる生徒を育てることが必要である。

以上のことから、本主題を設定した。

2 研究の方法

(1) 主体性を育てるための工夫

昨年度までの社会科の課題は、単に語句を暗記したり、その場限りの文章作成を行ったりということになりがちであった。課題に取り組むことによって、社会科の理解が深まったり、どんな問いに対しても自信を持って文章で答えたりできるようになるといったような、生徒が魅力を感じられるような課題を提示し、一人一人が意欲を持って主体的に学習に取

り組むことができるようにする。

(2) 互いに高め合う関係を作る工夫

「互いに高め合う関係」とは、互いに意見を言い合い、意見交流をするだけでなく、考えの違いに気付き、その違いをなくしていこうとする対話を行うことで、一人ではできなかったことができるようになる関係のことである。その関係の構築のためには、教師が生徒の話し合いの内容やつぶやきなどを聞き取り、疑問点を全体で共有するといった働きかけが必要になってくる。

(3) 社会的事象の因果関係を考察するための工夫

思考ツールとして「因果関係マップ」というものを設定した(図1)。これは教科書や資料集などに書かれている文章を丸や矢印などの概念化された図で表す、というものである。こうすることで文章だけでは理解しにくかった社会的事象の連続性が捉えやすくなる。各事象間のつながりを「原因と結果」として捉え、その間を直線矢印で表す(図1①)。ただし、原因と結果というものは、幾重にも連なっていくものであることに留意する。例えば「 $A \rightarrow B \rightarrow C$ 」という3つ以上の事象になることもあり、Aを原因とすればBは結果であり、Bを原因とすればCが結果となる(図1②)。また、原因や結果は複数個が1つに連なったり、逆に1つが複数個に枝分かれしたりすることもある(図1③)。こうしたことを資料から読み取り、図に表し、思考を整理することを目指す。

学習が進んできたら、「誰かの意思が介在する場合」(「手段」「目的」、波線矢印で表す)についても取り入れるようにする(図1④)。そして、「原因・結果」の関係に「手段・目的」を合わせた複合的な図も表すことができる(図1⑤)。最終的には、複数回の授業や単元をまたぐ事象間の因果関係も捉えることを目標とする。

(4) 表現するための工夫

前項の「因果関係マップ」を文章化する学習を行う。例えば、「原因(○)」と「結果(▲)」であれば、「○が起きたことにより、▲となった」や、「手段(□)」と「目的(◆)」であれば、「◆するために、□が行われた」といった文章化が考えられる。

複合的使用では、例えば図1⑤(a)であれば、「Bを実現するためにAを行い、その計画通りの結果となった」、(b)であれば、「Bを実現するためにAを行ったが失敗し、Cを引き起こした」といった文章化が考えられる(図1⑤)。

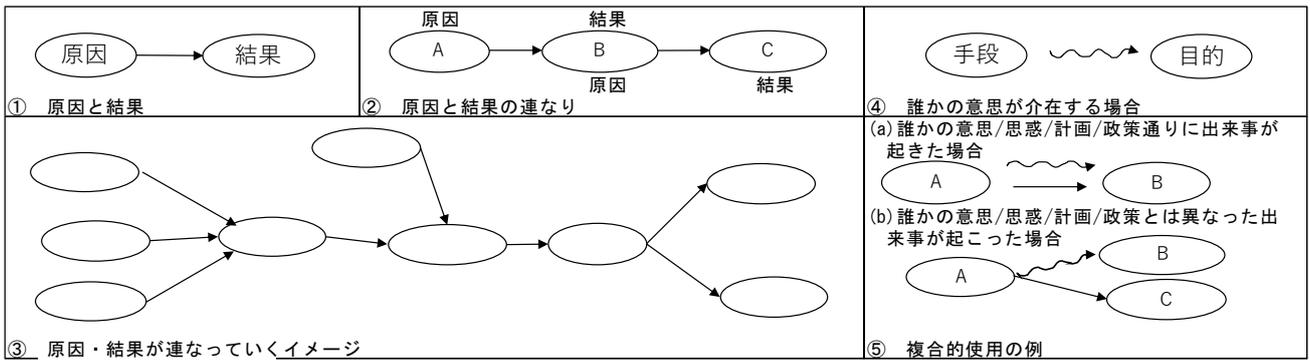


図1 因果関係マップ

3 授業実践 I

授業実践日：令和3年7月8日

学級：2年3組

題材名：フランス革命

(1) 実践内容

前半ではワークシートを用いて大まかな流れについて押さえ（共有課題）、後半では、ワークシートに示されたフランス革命中の出来事4つを因果関係マップに表し（出来事を追加することも可）、更に因果関係マップに示された内容を文章で表現する（ジャンプ課題）、という授業を行った。いずれの作業も3～4人の学び合いの形を取り、因果関係マップの作成・提出は個人で行わせ、文章の提出は班ごとで行わせた。

(2) 成果

① 生徒の主体性について

昨年度までの講義形式の授業と異なり、一人一人がワークシートに解答する形式の授業を取り入れたことで、教師の話聞くだけでなく、自ら教科書を読み、手を動かして学習に取り組むことができた。

② 生徒同士の対話について

学び合いの形式の授業を取り入れたことで、多くはないものの分からない部分について班員に質問する姿が見られた。また、教師が机間指導をしながら生徒の疑問点を聞き取り全体に共有したことで、不足していた生徒同士の交流を補うことができた。

③ 生徒の因果関係の捉えについて

生徒はおおむね因果関係という考え方を理解し

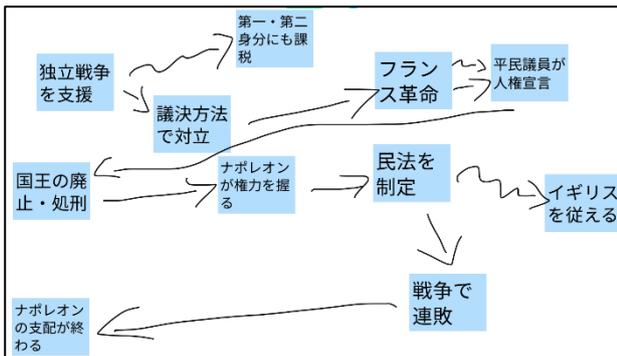


図2 生徒が作成した因果関係マップ

ていたため、教科書の文章や資料から図にまとめ概念化することができていた。一部の生徒は原因・結果だけでなく、手段・目的の関係や、それらの複合的使用についても記していた（図2）。

(3) 課題

① 生徒の主体性について

因果関係マップに対する理解が進んでおらず、そのため課題に意義を感じていないこともあり、意欲を持って積極的に課題に取り組むというところまでは達していなかった。生徒が魅力を感じるような課題を提示したり、班だけでなく学級全体で課題に取り組めるように授業を進めることによって、生徒一人一人が意欲的に楽しみながら学習に取り組むことができるようにすることが大切である。

② 生徒同士の対話について

共有課題やジャンプ課題が、最終的に一人一人が個別に提出する形のもので、交流を必ずしも必要としなかったために、分からないところがあったときに班員に質問する生徒がいたほかは、あまり積極的に意見交流する姿は見られなかった。また、対話の段階には達していなかった。課題の設定等の仕掛けが必要である。

③ 生徒の因果関係の捉えについて

因果関係そのものについての理解が進んでおらず、複雑な図を描く生徒はほとんどいなかった。全ての事象が1本の因果関係で表現する者が多かった（図3）。これからの授業の中で繰り返し取り組んでいくことで理解を浸透させていく必要がある。

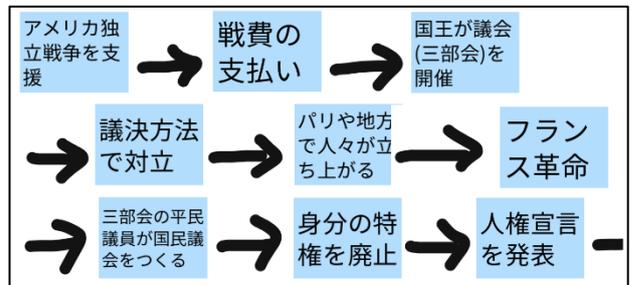


図3 生徒が作成した因果関係マップ

④ ジャンプ課題の設定について

「学び合い」の理論では、ジャンプ課題は「難易度は高いが、考えたいような課題」であるべきとされているが、生徒が今回のジャンプ課題に対し

て、取り組む意義を感じていないように見受けられた。因果関係マップの理解を進め、その意義を伝えていくとともに、因果関係マップを前提とした、「なぜナポレオンは皇帝になることができたのだろうか」や「もしナポレオンがいなかったらどうなっていただろう」といった課題を取り入れることで、因果関係マップに対して面白さを感じられるような授業展開にする必要がある。

⑤ 互いに高め合う雰囲気づくりについて

生徒が授業に楽しさを感じながら取り組んだり、互いに意欲的に交流したり、良い意見が出たときに称賛したりするといった姿があまり見られず、普段の学級の雰囲気づくりに課題が見られた。帰りの会など、日頃から生徒に働き掛けて、互いに高め合う雰囲気を醸成していく必要性を強く感じた。

4 授業実践Ⅱ

授業実践日：令和3年11月5日

学級：2年3組

題材名：明治維新のまとめ

(1) 実践内容

明治維新のまとめであり、基本事項（共有課題）については学習済みのため、発展的課題（ジャンプ課題）のみを扱った。初めに「なぜ日本は、欧米列強の植民地とならず、アジアで初の立憲国家となれたのだろうか」という「問い」を示し、これに答えるために因果関係マップを作成することを伝えた。3～4人を1つの班とし、教科書見開き1～2ページの範囲を割り振った。複数班で1つの範囲を割り振ることで、班同士の交流も意図した。出来事をいくつか抜き出した「出来事カード」と、白紙のカード、模造紙、マジック、セロハンテープを配布して、班で意見を出し合いながら担当の因果関係マップを作成させた。班ごとに作成した因果関係マップをクラスで確認した後、始めの「問い」に対する解答を班ごとに文章で作成させた。

(2) 成果

① 生徒の主体性について

授業実践Ⅰでは因果関係マップについて触れる機会が少なく理解が進んでいなかったことから、意義が感じられずに意欲的に取り組むことができない生徒が多かった。その後、普段の授業で因果関係マップを取り入れて繰り返し学習してきたことで理解が進み、その意義を感じる生徒が多くなった。また、意見を出しやすい共同作業としたことで、ほとんどの生徒は自分の意見を出しながら主体的・意欲的に因果関係マップの作成に参加していた。

どの出来事の間因果関係があるのか、因果関係をつなげていくためには何が抜けているのかと互いに意見を出し合う姿からは、授業実践Ⅰのときより

も、意欲的に取り組んでいるように感じられた。

また、因果関係マップの理解が進まずに意見交流にあまり活発に参加できない生徒がいたことも事実であるが、そういった生徒からは、「学び合いの授業が増えたことで、周囲に気軽に話をするができるようになり、分からないところを聞くことができるようになった」という声が聞かれた。

② 生徒同士の対話について

授業実践Ⅰの後の学習で因果関係マップに生徒も慣れてきたこと、交流しやすい共同作業としたことで、積極的に意見交流する姿が見られた。

授業は落ち着いた様子で静かに始まったが、学び合いが始まると、「この出来事カードの位置はどこか」、「出来事カードを因果関係で結び付けるためにどこにどんなカードが必要になるか」など、互いに意見を出し合い、班としての意見をまとめ、対話を行うことができていた。

③ 生徒の因果関係の捉えについて

授業実践Ⅰの後、因果関係マップの理解が進み、関係が枝分かれする図や複数のカードから1つに収束する図、「原因・結果の関係」と「手段・目的の関係」を複合的に表された図を作成する班が多く見られた。また、出来事の間をつながり意識し、教科書をじっくり読み込む姿も見られた。与えられた出来事カードだけではつながりを説明できないと考え、白紙のカードを用いて何個も出来事を追加する様子も見られた（図4）。

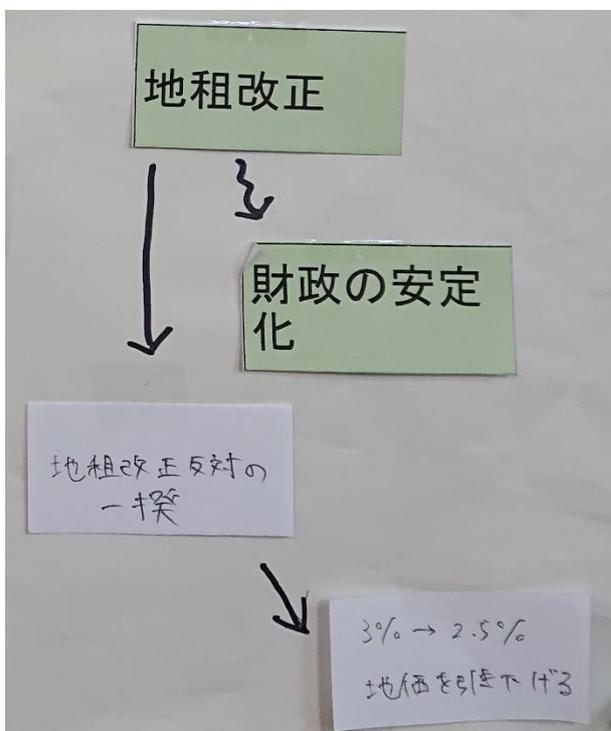


図4 生徒が作成した因果関係マップ

また、考察・文章表現の場面では、それぞれの担当した内容や他班の内容を参考にして的確な解答を示す班が多かった（図5）。教科書の文章だけでは捉

えにくい因果関係を視覚的に分かりやすい形に組み

外国の進んだ文化を積極的に日本に取り入れてそれを発展させる事ができたから。	・外国との関わりを積極的に多く持っていたため ・外国との差を理解して欧米の文化を取り入れたから ・色々な改善方法を生み出して国をより良くしたから
日本は進んで欧米の文化や政策を真似したり、使節団などを派遣して実際に欧米の産業などを視察してそこで学んだことを、すぐに取り入れたから。	欧米を参考にして日本の国力を強化して、外交関係を結ぶことで植民地化を防いだ。

図5 生徒の「問い」に対する解答

替えたことで、言葉だけの資料では難しかった考察・思考がしやすくなったと考えられる。

④ ジャンプ課題の設定について

授業実践Ⅰでは因果関係マップの意義を感じていない生徒が多かったが、その後の授業で繰り返し扱ってきたことで理解が進み、活発な意見交流が見られた。この様子から因果関係マップを用いて考えることの面白さを見いだしている生徒が多いように感じられた。また、因果関係マップを用いた考察として「なぜ～」という「問い」を示した。明治維新の基礎の上に成り立つ現在の日本に住む生徒自身につながる問いであり、因果関係マップから考察できる問いでもあったため、意欲的に考え、解答していた。

⑤ 互いに高め合う雰囲気づくりについて

授業実践Ⅰでは、生徒が学び合いの授業を通して互いに高め合いながら主体的に学習を進めていくためには、授業以外でも聴き合い、称賛し合い、尊び合う学級づくりが大切であることが分かった。これを受け、部活動の新人大会や体育祭などを通し、互いに称賛し合う関係づくりを目指した。これにより、安心して疑問点を述べたり、意見を言ったり聞いたりすることのできる雰囲気が醸成され、一人では解決できなかったことも交流・対話をすることで可能になったと考えられる。

(3) 課題

① 生徒の主体性について

因果関係マップへの理解が進まず、積極的に教科書を読み込んだり、考えたりすることができない生徒もおり、支援が必要と感じた。

② 生徒同士の対話について

多くの班で活発に意見交流する姿が見られたが、支援が不十分で、中には因果関係マップについて理解ができず、あまり交流に参加できていない生徒もいた。こうした生徒に対する支援が必要である。

③ 生徒の因果関係の捉えについて

因果関係マップの理解に加え、これを基に考察する方法や、考察した結果を文章で表現していくための方法を学習することも必要であると考えられる。

5 おわりに

(1) 結果と考察

学び合いの授業を行うことで互いに高め合う環境をつくることができるようになり、その中で社会的事象の間の因果関係を考察し、因果関係の要素を取り入れた文章表現をすることができるようになった。思考の枠組みを用意したことで、思考がしやすくなり、自分が理解したことを用いて対話したり、文章に表現したりすることが可能になったと考える。生徒から「学び合いをすることで気軽に分からないことを聞けるようになった」「因果関係マップを用いることで教科書の流れが理解できるようになった」という声も聞かれた。授業実践Ⅱにおいて、多くの生徒が活発に自分の意見を述べていたこと、「問い」に対して的確な解答を文章で表現していたことなどがこれを裏付けており、これまでの取組が有効であったと考えられる。

一方で、因果関係マップについてほとんど理解ができず動きが止まってしまう生徒がいたのは、理解ができなかったときに理解できるまで学ぶことができなかつたり、後に復習する手立てがなかつたりしたことが原因と考える。

(2) 今後の課題

(1)を受けて、以下の3点を今後の課題としたい。

- ①理解が進まない生徒に対して、こまめに状況を把握し、因果関係マップの考え方、作り方を伝える等の支援を心掛ける。
- ②因果関係マップに関する一貫した教材を作成する。
- ③社会科の全ての分野において、互いに高め合う環境の中で社会的事象を考察する授業を推進する。

【注釈】

- *1 学び合いの授業では、「全ての生徒が解答することができる教科書レベルの課題」（「共有課題」と、「通常の授業よりもはるかに高いレベルで、3分の1くらいの子供にしか分からないような難しい内容の課題」（ジャンプ課題）を扱う。

【引用・参考文献】

- 1) 2) 3) 令和3年度富谷第二中学校教育計画
- 4) 富谷市教育振興基本計画（平成30～34年）
佐藤学：『学校を改革する 学びの共同体の構想と実践』岩波ブックレット

【図表等の許諾について】

図2, 3は授業実践Ⅰの中で、図4, 5は授業実践Ⅱの中で生徒が作成した提出物の一部である。生徒の名前は伏せ、個人を特定しない形とすることで学校長の許諾を得た。